

# 壁新聞と中国の内政

東大助教授

中嶋嶺雄

## “老人体制”の苦悩

過般のフランスや西ドイツにおける政治指導者のいささか劇的な交替にもあらわれていたように、今日、世界主要国の政治指導者は、大幅に若返りつつあり、五十代、四十代がその主役を担いつつある。

「革命国家」として、もっとも若々しい力とみずみずしい感覚を要請されるべき中国では、周知のように革命の後継者（接班人）の問題がつねに意識されてきたにもかかわらず、依然として今日、世界の主要国首脳とは二〇年、三〇年の開きをもつ極度のジェロントクラシー（老人支配構造）を脱却しえないでいる。昨夏の中国共産党十全大会が「老・壮・青」の代的な「三結合」を強調した

ことの意味は、この点で中国首脳部の並々ならぬ苦悩を表明しているが、問題は依然として解決されていない。

毛沢東、周恩来らの首脳とは親と子の世代的距離がある王洪文、姚文元らの登場も話題を集めたが、これらの若手リーダーたちの抬頭は、極度のジェロントクラシーが生みだした政治指導体制の枯渇を補う暫定的かつ補助的な便宜措置であって、彼らが中国という巨大で錯綜した政治社会の次の時代の要石になり得る保証はまったくないのである。もとより、このような状況は、文化大革命や林彪異変に示された相次ぐ党内闘争によって必然的にもたらされたものであり、権力の集中と独占を求めてやまな

い毛沢東家長体制の当然の結果でもある。

しかも、全国人民代表大会およそ十年間にわたる未開催、国家主席の六年間にわたる空席、国防部長、総参謀長の数年にわたる不在などに示されるように、今日の中国における政治的リーダーシップの不確定な空白状況がなお継続するなかで、いよいよ、毛沢東以後の時代、毛・周以後の時代への展望を試みなければならぬ中国としては、状況はいよいよ深刻なものにならざるを得ないであろう。

そのうえ、今日の中国の指導者たちはオックスフォード大学の中国問題の碩学G・F・ハドソンが鋭く指摘しているように、すでに六〇年代前半の実権派の時代には、毛沢東といえども、「まるで死んだ父親をその葬式であしらうように」

扱われた時期」を経験したことがあるのであって（G・F・ハドソン「中国の外交」に関するシンポジウムでの発言、「プロブレムズ・オブ・コミュニズム」一九七一年十一月〜十二月号）、それだけに、毛沢東以後ないしは毛・周以後の時代において、このような経験をもっと深刻なたちで体験せねばならない不安に彼らは大きくつきまとわれざるを得ないのである。

## “長い暑い夏”を迎えた中国

このような背景が存在するなかで、去る五月には、周恩来総理の職務軽減措置が、健康上の理由から、党中央政治局会議において決定されたことがほぼ明らかになった。

だが、本年一月下旬以降「批林批孔」



北京で林彪前中国国防相の「犯罪」について講義を受ける人民解放軍第8軍の兵士たち

運動が再び高揚するなかで、今春以来、周恩来が著しく低下していただけに、そしてまた、「紅旗」誌を中心に、「批林批孔」運動にかこつけた明白な周恩来批判が継続してきていただけに、この措置には政治的背景があるらしいと疑われたこともまた当然であった。

私は、今回の措置を、一九五九年四月に、毛沢東が「大躍進」政策挫折の責任をとらされて、やむなく国家主席を劉少奇にゆずり、政治の第一線から第二線に後退せざるを得なかったときの措置と同様のものとして比較せざるを得ないが、そのようななかで六月中旬以降、北京をはじめ各地に壁新聞が再出現しはじめた。

こうした経過のうちに、去る七月十四日の北京発AFP電は、「周恩来首相は最

## 「批林批孔」運動の現段階

こうして中国の政治情勢は、いま再び大きく流動化しはじめている。中国の「批林批孔」運動が、たんに林彪反党集団を批判し、孔子思想を批判するキャンペーンにとどまるものではなく、まさに今日の中国共産党中枢に存在する「潮流」と反潮流、「復辟と反復辟」の深刻な政治的相克を反映したものであることについては、これまでの中国の公式論調を虚

近、心臓発作に襲われ、周首相が入院しているらしい」と伝え、「最近、当地の外交筋の間では、中国政府当局者が周首相は「絶対安静状態」にあると示唆したとの話も流れていた」と報道した。もとより一国の首相の「重病」であっても、その真相が明らかにされ得ない中国であるから、このような報道も、あるいは推測の域を出ないのかもしれない。

だが、いづれにせよ、中国が再び「政治的な」長い暑い夏を迎えることになりそうだ」との観測（六月十八日北京発ロイター電）は、ほぼ疑いなくように思われる。しかも、この「長い暑い夏」が、たんなる季節の循環によっては消え去りそうにないところに、今日の中国情勢の重大な意味があるといわねばならないだろう。

心に読めば、すでに明白である。

去る七月一日の中国共産党創立五十三周年を記念する「人民日報」社説「党はすべてを指導するものである」は、林彪異変以来、この建党記念日にさえ社説が出なかっただけに注目されたものであったが、党の一元化指導を再三強調した同社説でさえも、「党委員会内部で誤った路線に対する正しい路線の闘争、誤った思

想に対する正しい思想の闘争をくりひろげ、自らの活動における欠点、誤謬にたいし、批判と自己批判を進めること」の重要性を強調しているのである。

この「人民日報」社説と同じ時期に、台湾の中央通訊社が伝えた未確認情報（台北発六月二十九日AFP電）によると、この六月九日に広州では、「批林批孔」集会の席上、周恩来派と江青派の大規模な武闘が生じ、数百人の死者が出たといわれている。この情報の信憑性についてはともかく、去る六月中旬以来の壁新聞は広西省で「批林批孔」運動に関連した武闘がつづき、この六月十九日は死傷事件を含む、とくに大規模な武闘が発生したとも伝えられているだけに、これらの情報が中国の政治情勢がはらむ問題の根深さを示唆するものであることはほぼ間違いないであろう。

もとより、今日の「批林批孔」運動は特定の人物ないしは特定の政治勢力への批判や反批判を含むのではなく、党中央に分裂や対立はない旨を中国側はしばしば主張し、それを受けてわが国の新聞も大方そのような方向での解説を試みているが、周知のように、文化大革命そのものに関しても、また九全大会の評価に關しても、さらには、林彪異変に關しても、そのような見方は、すべて誤っていた。

このような見方に立つたかぎり、たとえば「紅旗」一九七四年第五号の余凡署名論文「林彪の反革命的策略の破産——一冊の黒いノート」を批判する——が、いまにいたって「中庸の道」を激しく非難し、「いわゆる『中庸の道』は、実際には反革命の復讐の道であり、陰謀家の人をあざむく道である」と力説して、林彪が一方では左傾的なポーズをとって反右傾を叫び、他方では極左にも反対する「中庸の道」を歩んだと執拗に論難していることの意味を解釈できないであろう。

はたして林彪にたいして、このような批判が妥当なものであろうか。内政的には脱文革をはかり、対外的には國益重視の現実主義外交を志向しようとした周恩来路線に対する批判を含蓄していることはほぼ明らかなのである。

次に指摘しなければならぬのは、様々な欲求不満をまじえた壁新聞による批判や毛沢東主席への直訴のなかで、復権した旧幹部への批判、「批林批孔」運動に対する「弾圧」への批判が進み、とくに文革期奪権闘争の産物として生まれた各級革命委員会に対する批判が圧倒的に目立つことである。

それらの批判は、革命委員会幹部の横暴や特権化を批判するもの、革命委員会「三結合」（幹部・革命大衆・軍）の

形骸化を批判するもの、北京市革命委員会批判に見られるように、革命委員会が会議を開かず、独断専行であることを批判するものなど様々であるが、そのような批判の過程で注目すべきことは、湖南省革命委主任代理・華國鋒、同副主任・楊大易、北京市革命委副主任・賈汀、江西省革命委主任・程世清、雲南省革命委副主任・陳康雲、黒竜江省革命委主任・汪家道、同第一副主任・劉光濤、陝西省革命委主任・李端三、浙江省革命委第一副主任・陳勵耘、武漢市革命委副主任・韓寧夫ら、中央地方の革命委員会幹部に対する批判がとくに目立っていることである。

このような革命委員会幹部に対する一連の批判は何を意味するのであろうか。今回の一連の批判は、明らかに脱文革化傾向への批判としての「反潮流」の動きを示しており、それが党委員会への批判としてではなく、文化大革命の結果新しく生まれた行政機関としての革命委員会批判に集中していること自体、各級革命委員会の上級機関である最高行政機関と

しての國務院に対する批判を意味するようにも思われ、この点でも、國務院の最高責任者としての周恩来總理への批判が含蓄されているとみなすこともできなくはないのである。

これらの批判の方向は、最近の周恩來の活動の低下、単に健康上の理由だけとは思われない「重病」・「入院」説、鄧小平副總理の再登場とそのめざましい活躍などの問題とともに、「批林批孔」運動の現段階における問題点の所在を鋭く示唆しているように思われる。

すでに中国共産党中央には、「批林批孔辦公室」が設けられ、江青夫人が主任に、張春橋と姚文元が副主任に、王洪文が顧問に就任して「批林批孔」運動を指導しているともいわれており、もしもこの情報が正しいとすれば、それはかつての文化大革命の司令部・文革小組のような中核的指導機関として、「批林批孔」運動の将来の行方を左右していくであろう。この点でも「長い暑い夏」を注目しなければならぬのである。

## 壁新聞の意味と機能

六月十三日以来、中国に再現した壁新聞は、一時期、明らかに当局の指導下にある「首都工人民兵」などによる撤去や

批判された革命委員会側による規制によって下火になるのではないかと推測されたが、七月中旬以降、再び各地に壁新

聞の洪水が再現して、新たな問題を投げかけている。

最近では、かつての紅衛兵による壁新聞や「金侯」署名の一連の壁新聞とそれへの批判・反批判が話題を呼んだが、このような壁新聞の洪水は、中国の政治状況が複雑に流動しているだけに、今後もなお継続するであろう。

中国の壁新聞には、これまでの中国の政治過程において、特殊な役割を担ってきた歴史があり、しかも、かつて一九五七年の「百花齊放・百家争鳴」運動の時期、一九六六年から六七年にかけての文化大革命初期、そして今回の「批林批孔」運動と、つねに重大な政治局面において大きな政治的意味をもってきた。

中国の壁新聞は、周知のように、「人民日報」や「紅旗」に代表される公式の八頭教的メディアVに対し、いわば非公式の八頭教的メディアVとして大衆運動や政治闘争の、とくにその初期に決定的な役割を果たしてきたのである。

このような壁新聞は、ある場合には、各種の党内通達や非公開文獻（その代表的なものが、林彪の反革命陰謀の書として広く流布されたことが十全大会で確認された「八五七一工程」紀要）であろう）などの八頭教的メディアVと並んで「人民日報」や「紅旗」のような公式の八頭教的メディアVがもつ役割をしのぐ

社会的・政治的意味をもってきたことはいうまでもない。

しかも、壁新聞がしばしば中国の一般大衆をとらえる真の理由は中国社会の極度に閉鎖的でモビリティの低い非情報社会としての性格に由来することも忘れてはならない。

この点で、今回の壁新聞の出現に関連して、六月二十八日北京発AFP電が、「市民たちが通常情報源としている公式報道機関は、センサーショナルな内容の事件についてはいっさい無視しているの」で、市民たちは壁新聞を見て、情報の穴を埋めているように思われる」と語っているのは、正しい指摘である。

こうした中国社会の非情報的性格を背景にした、情報をもつ者ともたざる者との大きな断絶こそ、壁新聞がしばしば汨瀝し、大きな役割を担ってきたことの原因なのである。いうまでもなく、きわめてプリミティブなメディアである壁新聞には、事実暴露と意見表明という二つの機能が二重にはめこまれている。そして壁新聞への大衆の関心と参与は、情報に対するそのような欲求不満の暴発であり、また、情報を直接的に抑制ないしは独占してきたと大衆が認めた者（今回の場合は、革命委員会の幹部たち）への大衆の反逆でもあるといつてよい。

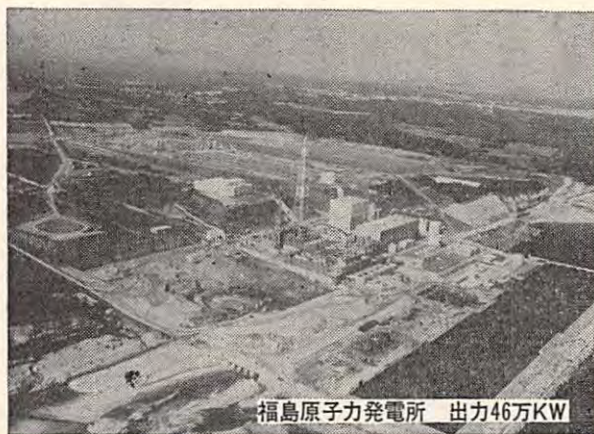
衆の反逆には、一定の限界があり、結局こうした状況の背後に、つねに政治の強い糸が結ばれていることはいうまでもない。

それだけに、今回の壁新聞の再現も、中国内政の一つの反映だといわざるを得ず、それがどのような方向に収斂されていくのかを注目しなければならぬのである。

当面、事態はなお多くの曲折をたどるのである。

△注▽ なお、壁新聞の社会的意味や中国のコミュニケーションの構築に関して詳しくは拙稿「現代中国の社会的コミュニケーション——政治指導とコミュニケーション構造——」（NHK「放送文化」一九七四年六月号）を参照していただきたい。

## エネルギーを生み出す力…東京電力



福島原子力発電所 出力46万KW

経済社会の向上と、産業活動の拡大発展により、電力の需要は毎年大幅に増加しており、昭和60年度には現在の約4倍に当たる3,000億KW時の使用が見込まれております。このため東京電力では、水力・火力・原子力発電所の建設をはじめ、送、変電設備、配電設備の増強など、電力流通機構の拡充効率化に全力を注いでおります。また、公害や安全対策等事業環境のきびしさに対応して、社内機構を一段と強化し、直面する経営課題の克服に全力をあげて取り組んでおります。



東京電力株式会社

本社：東京都千代田区内幸町1-5-1